2016年4月16日（土）　インド大使館　ウパニシャッド（第９回）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この度の熊本の大地震で犠牲になられた方たちと被災された方たちのために沈黙で祈りましょう。　　　　　　　［参加者全員で祈りを捧げました］

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ブラフマンの本性についてウパニシャッドの句を引用して説明しています。ウパニシャッドの内容は真理です。真理とブラフマンは同じです。真理、真理の本性、その本性の悟り方、悟るときの障害、悟りの結果がウパニシャッドの内容です。その内容は難しいのでいろいろな例や物語を使って説明しています。

砂糖でつくった人形を想像してください。その人形のどこを噛んでも甘い味がします。塩でつくった人形はその人形の頭でも足でも手でもどこを噛んでも塩味がします。そのようにウパニシャッドはどこをとっても真理だけです。

前回（2015年2月20日）は、引用句⑬～⑭について説明しました。

⑭句の復習をします。

　　　manomayaḥ prāṇaśarīro bhārūpaḥ satyasankalpa

　　（マノーマヤㇵ　プラーナシャリーロー　バールーパㇵ　サッティヤサンカルパ）

　　　ākāśātmā sarvakarma sarvakāmaḥ sarvagandhaḥ

　　（アーカーシャートマー　サルヴァカルマ　サルヴァカーマㇵ　サルヴァガンダㇵ）

　　　sarvarasaḥ sarvamidam abhyāttaḥ (avākyanādaraḥ)

　　（サルヴァラサㇵ　サルヴァミダㇺ　アッビャーッタㇵ（アヴァーッキャナーダラㇵ）

　「ブラフマンには心があり［manomayaḥ］、ブラフマンは精妙な体であり［prāṇaśarīro］、ブラフマンの意識は明るく［bhārūpaḥ］、ブラフマンの願いや意思は正しく真理であり［satyasankalpa］、ブラフマンであるアートマンは空（アーカーシャ）のようであり［ākāśātmā］、すべてのカルマ（創造、維持、破壊）はブラフマンがしており［sarvakarma］、ブラフマンにはすべての願いがあり［sarvakāmaḥ］、ブラフマンにはすべての匂いがあり［sarvagandhaḥ］、ブラフマンはすべてのもののエッセンスであり［sarvarasaḥ］、ブラフマンはすべてのものに遍在しており［sarvamidam abhyāttaḥ］、ブラフマンは話していない［avākyan］」という意味になります。

ここまではブラフマンの肯定的な形での説明でしたが、次はブラフマンの否定的な形での説明です。ブラフマンの説明は肯定的な形でも否定的な形でもすることができます。

今日は⑮句です。ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッドからの引用です。

⑮　etad vaitad akṣaram

　　（エータッド　ヴァイタッド　アクシャラㇺ）

　　　gārgī brāhmaṇa abhivadanti

　　（ガールギー　ブラーフマナ　アビヴァダンティ）

　　　asthūlam ananuḥ ahrasvadīrgham

　　（アストゥーラㇺ　アナヌㇷ　アㇷラスヴァディールガム）

　　　alohitam asneham achhāyam

　　（アローヒタㇺ　アスネーハㇺ　アッチャーヤㇺ）

　　　atamaha-vāyu anākāśam asaṅgam

　　（アタマーハ－ヴァーユ　アナーカーシャㇺ　アサンガㇺ）

　　　arasam agandham acakṣuskam

　　（アラサㇺ　アガンダㇺ　アチャクシュシュカㇺ）

　　　aśrotram avāk amano

　　（アシュロートラㇺ　アヴァーク　アマノー）

　　　atejaskam aprāṇam amukham

　　（アテージャスカㇺ　アプラーナㇺ　アムッカㇺ）

　　　amātram anantara avāhyam

　　（アマートラㇺ　アナンタラ　アヴァーヤㇺ）

　　　ya tad aśnāti kiñcana na tadaśnāti kiñcana

　　（ヤ　タッド　アシュナーティ　キンチャナ　ナ　タダシュナーティ　キンチャナ）

［マハラジが最初に朗誦し、次にマハラジの朗誦の後に続いて皆で朗誦し、最後にマハラジと皆が一緒に朗誦］

知識の勉強のための方法はいろいろあります。例えば一つの方法は聖典の勉強です。聖典の勉強をすると真理を理解して知識が出ます。これは普通の方法です。もう一つの方法は、何が正しく、何が永遠であり、何が一時的かなどの議論をたくさんして識別をすることで真理のことを理解する方法です。現代の西洋の哲学者の多くはその方法を採っています。

また別の方法は、悟った人とグルを喜ばせて勉強するやり方です。悟った人に贈り物をしてその人を喜ばせたり、グルのお世話をしてその人を喜ばせたりする（注：見返りを期待したものではなく、グルをお世話したいという気持ちからの「条件なし」の行為です）と、その人から教えてもらうことができます。また、いつも悟った人の周りにいて悟った人がほかの人に何を言っているのかを聞くことによっても勉強することができます。聖典の高いレベルの学者が議論するのを聞いても勉強することができます。

皆さんはジャナカ（Janaka）の名前を聞いたことがありますか。王様でありかつ聖者である方です。王様（Rājā）と聖者（Rishi）を合わせたRājārshi（ラージャールシ）という言葉があり、ジャナカのことをラージャールシと言っています。

インドで昔、一番上のカーストであるブラーミンたちはいつも真理のことを勉強して教えていました。王様（クシャトリア（戦士）のカースト）の中にも悟った人がいました。ジャナカがそうです。ジャナカは自分でたくさん勉強して実践して悟りました。面白いのは、カーストではブラーミンより低いクシャトリアであるジャナカのところにブラーミンたちが勉強しに来ていたことです。

インドの基準では、悟った人、賢い人が最も尊敬されます。インドと西洋では尊敬する基準が違います。西洋では、お金持ちや力がたくさんある人が尊敬されますが、インドでは聖者を一番尊敬します。

ジャナカのもう一つの名前はヴィデーハ（Vi-deha）です。Vi（接頭辞）は「ない」（無、非など）という意味です。dehaは「身体」という意味です。ヴィデーハ（Vi-deha）は「身体はない」という意味です。バガヴァッド・ギーターの講話（2016年4月2日）のときに「デーハスタ アピ ナ デーハスタ（dehasthah api na dehasthah）」（肉体を持ちながら体の中にいない）のことをお話ししましたね＊１。生きている間に解脱することができますと、その人（ジーヴァンムクタ（jīvanmukuta）＊２）は、身体（deha）はありますが「身体意識」はありません。ジャナカはそこまで悟った人ですからヴィデーハとも呼ばれていました。

＊１、＊２日本ヴェーダーンタ協会ホームページ ＞ テキストギャラリー ＞ インド大使館（バガヴァッド・ギーター）講話 ＞ 2016年04月（ヨーガ・スートラ－⑭）講話テキスト参照

ジャナカはときどき自分のパレス（王宮）で儀式を行っていました。儀式のときに雌牛をブラーミンたちに与えていました。雌牛からはミルク、バター、ギーを得ることができます。人はそれらを飲んで食べて力強くなることができますし、バターやギーは儀式のためのお供えとして用いられます。そのため、雌牛は当時、大きな富（wealth）でした。

ジャナカの話を聞いていろいろな国から多くの学者や聖者がやって来ました。当時の学者は生徒から何ももらっていなかったので貧乏でした。ですから時々自分たちをサポートしてくれる場所に行って寄付やお布施や贈り物をもらっていたのです。集まってきた学者や聖者たちは真理について議論をします。それを聞くことがジャナカの目的でした。ジャナカは悟った人ですけれどももっと学びたかったのです。霊的な経験に限度はありません。ブラフマンは無限であり、ブラフマンの知識と経験も無限だからです。「ラーマクリシュナの福音」（日本ヴェーダーンタ協会発行）にそのことが何回も出てきます。

ジャナカは集まった学者、聖者、ブラーミンたちに言いました、「皆さんの中で一番悟った人（一番高い聖者）に私は1,000頭の雌牛を提供します」と。その雌牛はが金で覆われている特別なものでした。しかし、集まった人たちの中で誰が一番の聖者かはすぐにはわかりませんでした。自分が一番と言ったところで他の人が反対する可能性があります。

集まった人たちは静まりましたが、少し経つと、ヤッギャーバルキヤ（Yājñavalkya）が弟子たちに「この1,000頭の雌牛を私のアーシュラムにつれて行ってください」と言いました。ヤッギャーバルキヤは自分が一番だと表明したことになります。それを聞いて皆さんは反対しました。そして、ヤッギャーバルキヤに「あなたのうぬぼれではないですか。聖者、賢者、悟った人がたくさんいる中でなぜあなたが一番なのですか。それでは私たちがあなたに質問します。正しく答えられたならば、雌牛を連れて行くことを受け入れますが、正しく答えることができなければ連れて行くことはできませんし、恥をかくことになりますよ」と言いました。

聖者たちは真理について、ブラフマンについて、ヤッギャーバルキヤに質問しました。ヤッギャーバルキヤは自信をもって皆さんの質問に答えました。その答えがもし間違えていれば、聖者たちから間違いを指摘されるわけですが、誰も指摘しませんでした。そのようにして議論は続けられました。そして今度はガールギー（Gārgī）が質問しました。ガールギーは女性の聖者です。昔のインドでは男性だけでなく女性もブラフマンのことをとても勉強しました。ウパニシャッドの中には女性聖者の名前もあります。その一人がガールギーです。

ガールギーは、「ヤッギャーバルキヤ、今から私が質問しますので答えてください。何がアーカーシャに充満（pervade）していますか、広がっていますか（kasmin nu khalu ākāśā otaś ca protaś ceti）」と言いました。アーカーシャはとてもとても精妙で遍在なものです。アーカーシャはよく「エーテル」と訳されますが、「現れていないエーテル（unmanifest ether）」と訳す方が適切かもしれません。

ガールギーの質問に対して、ヤッギャーバルキヤは答えました、「おお、ガールギー、このものは本当は、衰えておらず、変化しておらず、なくなっていないもの（＝ブラフマン）であるとブラフマンを悟った人が言っています（etad vaitad akṣaram（エータッド　ヴァイタッド　アクシャラㇺ）、gārgī brāhmaṇa abhivadanti（ガールギー　ブラーフマナ　アビヴァダンティ））」と。

etad（エータッド）は「このもの」、vaitad（ヴァイタッド）は「本当は」という意味です。akṣaram（アクシャラㇺ）はkṣaram（衰え、変化し、壊れてなくなるもの）の否定形（接頭辞の「a」は非、無、不、を表す；この句中の語に多用されています）ですから、「衰えていない、変化していない、なくなっていないもの」という意味になり、それがブラフマンです。これに対し、すべての物とすべての生き物はkṣaram（衰え、変化し、壊れてなくなるもの）です。すべての物とすべての生き物は始まりがあり終わりもあり変化しており衰えています。ブラフマンはそうではありません。人は（身体のことを考えてみれば）生まれ、育ち、年を取り、衰え、変化し、髪は白くなり、そして最終的に亡くなります。バガヴァッド・ギーター＊の第８章（Akṣarabrahmayogaḥ）にはkṣaramとakṣaramが入っています（例えば、第８章第１１節参照）。

＊日本語訳「シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター」（日本ヴェーダーンタ協会発行）

brāhmaṇa（ブラーフマナ）は２つの意味に使われます。一つの意味はカーストを表します。ブラーミン（カーストの一番上の身分）の息子、娘はみなブラーミンです。ブラーミンは英語ですが、サンスクリットではbrāhmaṇa（ブラーフマナ）です。brāhmaṇaのもう一つの意味は「ブラフマンを悟った人」です。ブラフマンのことを勉強した人もbrāhmaṇaです。ここでは、「ブラフマンを悟った人」の意味になります。「頭で理解すること」と「悟ること」とは全然違います。頭で理解できても悟ることができる人はとても少ないです。頭だけで理解した人の言動や考えはバラバラで調和がなく矛盾が出ます。悟りますと、身体、心、考えはみな同じです。

とても簡単な例を挙げましょう。聖典の勉強をしますと我々は「私は身体ではない、私は魂です、身体は一時的です、魂は永遠です、身体は無くなっても私は無くなりません、なぜなら私は、本当は魂だからです」ということを何回も読んで勉強していますけれども、（病気がありますと）死の恐怖が出ます。しかし、悟った人は死の恐怖が出ません。本当にそのことを理解しましたから「身体が無くなっても私は無くなりません」ということを１００％信じています。そしてその人は、身体についての執着はなく、一時的なものについての執着はありません。一方で、聖典の勉強している学生、先生にはけっこうたくさん執着があります。これが「頭で理解すること」と「悟ること」との違いです。

ヤッギャーバルキヤはガールギーに言いました、「ブラフマンがアーカーシャに充満しています」と。

この後、ブラフマン（絶対の真理）の特徴の説明が続きますがその目的は一つです。「ブラフマンは相対的なものではなく、絶対のものである」ことを説明するためです。相対的なものにはいろいろの性質があります。しかしブラフマンは「絶対のもの」ですから相対的なものの性質はありません。

ブラフマンを「相対的なものではない」と言っていますが、なぜブラフマンの説明に相対的なものを使っているのでしょうか。なぜならば、「絶対のもの」の経験が我々にはないからです。相対的なものの経験はあります。見たことがありますし、認識があります。それで相対的なものを使って「このものではない」と言っています。「絶対のもの」の経験がありませんからそれを肯定的に説明することができないのです。

お菓子を例にとります。お菓子にはいろいろな種類のものがありますね。食べたことがないお菓子があったとしても、ほかのいろいろなお菓子を食べた経験がありますから例を使ってその食べたことのないお菓子を説明することができます。例えば、そのお菓子の色や形や材料を説明されると食べたことがないお菓子であってもそのイメージが出ます。

ところが「絶対のもの」をイメージすることは全くできません。その経験がないからです。しかし、それでも「絶対のもの」を説明したい、「絶対の真理」を説明したい、教えたいので、経験のあるものを使って、「絶対の真理」は「これではない、これではない」と説明しているのです。別の説明の方法はありません。

しかし、本の勉強には限度があります。本の勉強はヒントのようですね。「これではない、これではない」と説明されても、それが「本当は何であるか」はわかりません。そのためには瞑想をしなければなりません。食べたことがないものは、説明されても本当は食べないとわかりません。例えば、寿司を食べたことがない人に寿司の味をいろいろ説明しても寿司の味ははっきりわからないですね。その人への助言は「食べてみてください」です。食べないとはっきりわかりません。聖典の説明の仕方は、「それではない、それではない」です。「本当は何であるのか」を知るには瞑想しなければなりません。頭だけではわかりません。

次はasthūlam（アストゥーラㇺ）です。その意味は「粗大なものではない」です。我々が認識したものはほとんど粗大なものです。例えば、我々が見たものはほとんどが粗大なものです。それでは粗大なものではないので精妙なものでしょうか。しかし、精妙なものでもありません。このように意味が対（ペア）になって、ブラフマンが「粗大なものではなく精妙なものでもない」ことを表しています。

次はananuḥ（アナヌㇷ）です。anuではないことを意味しますが、anuは「原子」です。ここで言う「原子」は、科学的に定義されるものではなく、インドのウパニシャッドの考えによれば、髪の毛の１本を１００に分け、その１つをさらに１００に分けたものです。しかし、それほど精妙なものであってもブラフマンではないという意味です。

それからahrasv（アㇷラスヴ）ですが、hrasvの意味は「小さい、短い」ですから、ブラフマンは「小さいもの、短いものではない」ことを表します。それでは、ブラフマンは「長い、大きい」ものでしょうか。それでもありません。dīrghaの意味は「長い」ですから、adīrgham（アディールガム）は、ブラフマンが「長いものではない」ことを表します。Ahrasvadīrgham（アㇷラスヴァディールガム）は、ブラフマンが「短くもなく長くもない」ことを表します。

また、ブラフマンは「厚くもなく薄くもない」ことを言っています。どうしてそのように表現しているのでしょうか。なぜならば、ブラフマンは物ではないからです。「厚い、薄い、小さい、大きい、長い、短い」というのはみな物の尺度（measure）です。しかし、ブラフマンは物ではありません。

次は、alohitam（アローヒタㇺ）です。lohita（ローヒタ）の意味は「赤い」ですから、alohitam（アローヒタㇺ）はブラフマンが「赤くない」ことを表します。それでは、ブラフマンは白いですか、黒いですか、黄色いですか。それらでもありません。色はないです。alohitam（アローヒタㇺ）は一つのシンボルであり、ブラフマンが「赤くもなく他の色でもなく、色はない」ことを表します。

それから次は、asneham（アスネーハㇺ）です。sneha（スネーハ）は湿気（moist）です。ブラフマンは「湿気ではなく、その反対のドライ（dry）でもない」ことを意味します。次に、achhāyam（アッチャーヤㇺ）です。chhāya（チャーヤ）は影です。粗大なものはすべて陽光が当たると影ができます。しかし、ブラフマンは粗大なものではありませんから影は出ません。

次は、atamah（アタマーㇵ）です。tamah（タマーㇵ）は暗いという意味です。ブラフマンは「暗さ（darkness）ではない」です。それから次は、a-vāyu（アヴァーユ）です。vāyu（ヴァーユ）は風です。風は５要素の一つです。ブラフマンは「風ではない」ということです。

次は、anākāśam（アナーカーシャㇺ）です。アーカーシャも要素の一つです。ブラフマンは「アーカーシャではない」ということです。要素は５つありますね。すなわち、kshiti（土）、ap（水）、teja（火）、marut（空気）、最終的にはvyoma（アーカーシャ）です。ブラフマンは要素ではありません。

それから次に、asaṅgam（アサンガㇺ）です。saṅga（サンガ）の意味は「執着」です。asaṅgam（アサンガㇺ）は「執着がない」ということです。執着について説明します。執着は、物について、人について、自分の身体について出ます。執着が出ますと問題が出ます。バガヴァッド・ギーターの中で神様は、「asaṅgam（アサンガㇺ）、saṅga-rahitam（サンガラヒタム）」（執着はよくない。それを止めてください）と助言しています。バガヴァッド・ギーターだけでなく、キリスト教、仏教など他の聖典の中でも無執着（non-attachment）を助言しています。普通の人は執着と愛とを一緒にしており、執着がないと愛することもできないと考えています。

執着がありますと何が問題となるのでしょうか。真理・神様の悟りと執着とは何が関係ありますか。－「永遠のものから離れる」（参加者の答え）、「それです」（マハラジ）。－ 執着が悟りの障害です。例えば、雲がかかりますと太陽が見えなくなります。その雲が執着です。執着がないとすぐに真理を理解することができます。太陽と雲をイメージしてください。雲が少しあっても太陽はたくさん陽光を注いでいます。しかし、雲は少しだけでも太陽を隠すことができます。執着（attachment）は悟りを妨げます。

もう少し説明します。執着は一時的なものです。執着の対象（object of attachment）は自分の身体、他人の身体、食べ物、飲み物、服、建物、・・・などなどたくさんあります。ときどきとても小さいものが対象になります。例えば、ペットです。皆さんの対象はそれぞれにたくさんありますね。執着の対象が一つだけだった例についてお話します。

それはバラタの例です。バラタは聖者でいつも霊的な実践をしていました。バラタは、鹿に赤ちゃんが生まれましたのでいつもその赤ちゃんの面倒を見ていました。赤ちゃんから離れますととても心配になるほどでした。バラタは亡くなるときにその鹿の顔を見ながら亡くなりました。神様のことを忘れて、鹿のことを考えて亡くなりましたので、バラタは来生で鹿の形で生まれました。それが執着の結果です。この話はとても有名です。

しかし鹿になっても、前世でたくさんの霊的な実践をしましたから前世の気づきが１００％無くなってしまったということはありませんでした。自分が前世ではたくさんの霊的な実践をしてきたのに、最終的には鹿の赤ちゃんをとても好きになって執着になりこの状態（鹿）になったことを思い出しました。考えてください、聖者から鹿です！ 輪廻、カルマの法則ですから。

けれど鹿も永遠ではないです。鹿で亡くなったとき、来生ではとても気をつけるようにしました。いつも物や人から離れて何も話さず、何も好きにならないようにしていました。その方の名前はジャダバラタ（Jada-bharata）です。とても有名な聖者になりました。皆は彼のことを、何も話さない、何も仕事をしない、笑わない、好きなものは何もない、とても鈍い人と考えました。親戚の者は彼をイディオット（idiot）、ハンディキャプト（handicapped）、何もできない人と考えました。しかしジャダ・バラタの中はとてもとても清らかでした。

一時的なものを好きになりますと永遠なものを見ることはできません。それが執着の問題です。執着の対象はとても小さいですけれど、その小さいものが大きい神を隠します。ですから、聖典の中では、「執着には気をつけてください」と繰り返し言っています。

本当は物が問題なのではなく、問題は心の考えです。物があります、人がいます、それが執着の原因ではなく、心の考えで執着になっています。先ほどお話しましたジャナカは王様でしたが執着は全然ありませんでした。

我々は何か物を作りますと、例えば、建物を作りますと、それについてとても執着が出ませんか。自分で作ったもの（子供、物、建物など）についてたくさん執着が出ます。しかし、神様のことを考えてください。神様はこの宇宙を創っていますけれども、この宇宙について執着はまったくありません。我々は小さいものを作ってすぐにそれが執着になっています。

ブラフマン（すなわちプルシャ）は無執着（asaṅgam（アサンガㇺ））です。「ラーマクリシュナの福音」の中に無執着の例があります。例えば、蓮の葉の上の水が挙げられています。それで無執着のイメージがわかりますね。物があっても執着はない、無執着です。神様は宇宙を創り維持し破壊しますが宇宙について執着はないです。

バガヴァッド・ギーターの第１３章第３２節、第３３節の中にも説明されています。

*Anāditvān nirguṇatvāt paramātmā’yam avyayaḥ /*

*Śarīra-stho’pi kaunteya na karoti na lipyate // 32*

*このは不滅不変であり、の性質作用を超越している。それ故、クンティー妃の息子よ！私は肉体の中に在るのに、何事もなさず、行為のいかなる影響も受けることはない。*

*Yathā sarva-gataṁ saukṣmyād ākāśaṁ n’opalipyate /*

*Sarvatr’āvasthito dehe tathā’tmā n’opalipyate // 33*

*エーテル（アーカーシャ）は、到る処にあるが、その精妙さの故にどんな物にも汚されることがないように、もまた、体の中の至る処に存在するが、何ものにも影響され、汚されるということはない。*

［第３２節について］ブラフマンは永遠であり、偉大なアートマンは衰えていませんし、無くなっていません。その存在（ブラフマン）は我々の身体の中に魂（アートマン）の形で存在していますけれど、アートマンは身体の状態（例えば、あるときは元気、あるときは弱い、あるときは力強い、あるときは病気など）や心の状態（例えば、あるときはとても喜び、あるときは苦しみ、悲しみ）から何も影響を受けません。無執着（no attachment、asaṅgam（アサンガㇺ））ということです。

アートマンは身体という建物の中に住んでいますけれど、住んでいる人（アートマン）に執着はありません。ですから、アートマンは身体の中にいて、身体の状態、心の状態が変化しても何も影響を受けません。家族の中にいても同じイメージで実践しますと結果が同じになります。家族の皆さんを愛していますが執着がなければ何の影響も受けません。

先ほど、「デーハスタ　アピ ナ　デーハスタ（dehasthah api na dehasthah）」（肉体を持ちながら体の中にいない）を挙げましたが、「建物スタ アピ ナ 建物スタ」や「身体スタ アピ ナ 身体スタ」（日本語とサンスクリットによる新たな造語です）ということもできます。

［第３３節について］アーカーシャは遍在ですけれどもいろいろなものの中に入っていますね。良いもの、悪いもの、清浄なもの、汚いものの中にも入っています。それらのもの自体にはいろいろ性質がありますけれど、アーカーシャはそれらから何も影響を受けません。

同じように、身体の中に魂（アートマン）が存在していますが魂は何ら影響を受けません。しかし皆さん、そのアートマンはスッダー・アートマン［Suddha + Ātman］（純粋なアートマン）であることを覚えてください。もう一つのアートマンはジヴァ・アートマン［Jiva + Ātman］です。聖典の中でこれら２つの言葉が使われていますが、スッダー・アートマンとジヴァ・アートマンとは何が違うのでしょうか。

同じアートマンなのですが、我々の魂は「霊的な無知」（マーヤー）の影響で身体の状態を私の状態、心の状態を私の状態、と考えています。それを考えているときのアートマンがジヴァ・アートマンです。我々はいつもジヴァ・アートマンです。心の状態はいろいろありますね。あるときは楽しみ、あるときは苦しみです。そして無知の影響で私が楽しみ、私が苦しみます。その考えが出ているときはジヴァ・アートマンです。

それではスッダー・アートマンとは何でしょうか。知識を得た結果、身体と心から離れますと身体の状態は私の状態ではなくなり、私はいつもピュア（純粋）です。私はいつも絶対の真理、絶対の知識、絶対の存在（サッチダーナンダ）です。そのことを考えますとあなたはスッダー・アートマンです。私を身体・心（の状態）と同一視しますと私はジヴァ・アートマンです。そうしないで私を魂と同一視しますと私はスッダー・アートマンです。それで２つの言葉を使っています。

我々は自分の本性を忘れています。「ラーマクリシュナの福音」の中にそのが書かれています（改訂版p.183、p.332参照）。－ あるトラの赤ちゃんがヤギと一緒に育ちました。そのため、自分がトラであることに気づきませんでした。いつもメェメェと鳴いて草を食べていました。「草食性のトラ」（grass-eating tiger）というのは奇妙ですね！行動はすべてヤギのようにしていました。その状態はジヴァ・アートマンです。そのために苦しみ、悲しみ、心配、困ったこと、恐れ、混乱がありました。そのとき別のトラが森から出てきました。そして草を食べていたそのトラを強引に水辺まで連れて行き、「水に映ったあなたの顔と私の顔を見てください」と言いました。その森のトラはグルです。「あなたの顔と私の顔は一緒です」とグルが言います。「私の魂とあなたの魂は一緒です。私もスッダー・アートマンであり、あなたもスッダー・アートマンです」

執着がある間は、ジヴァ・アートマンの状態です。神様はこの宇宙を創っても執着はありません。アーカーシャは遍在していますけれども何も執着は出ていません。ほかもものと混ざることはなく純粋で束縛されていません。「ラーマクリシュナの福音」の中にそのことが書いてあります（改訂版p.199、p.760参照）。－ 風（空気）は悪い臭い（bad smell）と良い香り（good smell）の両方を運んでいますが、それらの匂い（smell）について執着はなく、無関心（indifferent）です。

無執着の一番の例はシヴァ（Śiva）です。シヴァの奥さんはドゥルガー（Durgā）です。シヴァには、サラスワティー（Sarasvati）とラクシュミー（Lakshumi）という名の娘たちと、ガネーシャ（Gaṅeśa）とカールッティカ（Kārtika）という名の息子たちがいました。シヴァにはこのような家族がいましたが、一番好きなのは火葬場（crematory）でした。

サンニャーシー（出家）が理想とするのはシヴァです。放棄と無執着の一番の例はシヴァです。シヴァのやり方見てください。家族がいますが家族について執着はなしです。シヴァは、「神がこの宇宙を創っても執着はない」ということのシンボルです。

asaṅgam（アサンガㇺ）の次はarasam（アラサㇺ）です。rasa（ラサ）は「味わう」という意味ですから、arasam（アラサㇺ）は「味がない」ということです。次はagandham（アガンダㇺ）です。「匂いがない」という意味です。ブラフマンは物ではないですから、ブラフマンには物の性質がないことを表しています。

次はacakṣuskam（アチャクシュシュカㇺ）です。cakṣuは「眼」という意味ですから、「眼がない」ということです。次はaśrotram（アシュロートラㇺ）です。śrotraは「耳」ですから、aśrotram（アシュロートラㇺ）は「耳がない」ということです。それらはブラフマンには「感覚が何もない」ということのシンボルです。例えば、眼もなし、耳もなし、鼻もなし、舌もなし、皮膚もなしです。

次はavāk（アヴァーク）で、「５つの活動器官又は行動器官（手、足、発話器官、生殖器官、排泄器官）がない」という意味です。amano（アマノー）は、「心がなし」という意味です。感覚だけでなく、心もなしです。

⑮句の途中ですが、今日はここまでです。